

90%の人が新たに頑張ろうという気持ちになり、良い影響を与え生活改善のきっかけができた。しかし、生活改善のきっかけはできても悪い生活習慣がどのくらい改善するかは疑問である。今後この気持ちをいかに長く持ち実行できるかが重要であり、この結果を生かした糖尿病指導が必要である。

10 65歳未満の糖尿病患者の検討

— 高齢者糖尿病患者と比較して —

阿部 英里・信田 慶太・佐々木英夫
佐野 和江・石井 幸子・池田由美子
長谷川美代

新潟こばり病院糖尿病センター

6ヶ月以上継続して通院している治療安定期の糖尿病患者を65歳以上(高齢者群157名)、65歳未満(非高齢者群170名)の2群に分け、その臨床的特徴について比較した。血糖コントロールについては両群に差はなく、推定罹病期間は高齢者群で長期であった。また高齢者群では脈圧の拡大傾向とTG、BMI値の低値を認めた。

合併症ではmicroangiopathyのうち網膜症($p = 0.005$)、腎症($p = 0.02$)は非高齢者群より高齢者群に有意に多くその進展については両群に有意差を認めなかった。

macroangiopathyの発症率は両群間に有意差を認めず(心臓合併症 $p = 0.70$ 、脳血管障害 $p = 0.57$)、心筋梗塞については非高齢者群で有意に上昇($p < 0.01$)を認めた。

microangiopathyの発症には罹病期間の関与が考えられたがmacroangiopathyでは糖尿病以外の要因が大きく関与している可能性が示唆された。

11 新潟県における小児期発症1型糖尿病のコホート調査報告～HbA1cと家庭、学校生活との関連およびHbA1cの医療機関間較差の検討～

菊池 透・長崎 啓祐・樋浦 誠
内山 聖・新潟小児糖尿病調査委員会
新潟大学大学院医歯学総合研究科
内部環境医学講座小児科学分野

1型糖尿病患者53名を対象にHbA1cと家庭、学校生活との関連、医療機関間較差を検討した。主治医が家庭、学校に問題があると考えている患児は8.87%、8.84%で、そうでない患児は7.73%、7.87%であった。複数の患児を診療している医療機関、医師の患児は7.63%、7.48%であり、そうでない医療機関、医師の患児は8.04%、8.20%であった。HbA1cは、家庭、学校生活と関連し、医療機関間、担当医間較差も存在した。

12 糖尿病患者および視覚障害者にみられる睡眠障害・うつ病の頻度とその特徴

山田 幸男・平沢 由平・高沢 哲也
大石 正夫*・土屋 淳之**・清水美知子**
石川 充英***・伊藤 陽****
信楽園病院内科
同 眼科*
全国パーチェット協会江南施設**
東京都視覚障害者生活支援センター***
新津信愛病院****

【目的】視覚障害者にみられる睡眠障害やうつ病の頻度、その特徴について検討した。

【方法】視覚障害リハビリテーション外来を受診した210名を対象に睡眠障害やうつ病について郵送によるアンケート調査をした。

【結果】ほぼ半数の視覚障害者が睡眠障害やうつ病を経験していた。とくに糖尿病網膜症と女性患者で高頻度であった。非24時間睡眠・覚醒障害によると考えられる患者が15%みられた。睡眠障害やうつ病は日常生活や仕事の継続が困難になったときにもっとも多く現れた。

【結論】睡眠障害やうつ病は日常生活や仕事の継続が困難になったときに高頻度に現れるので、この時に心理的援助がとくに大切である。